



1.2 苗は仮植えをして根を丈夫にしてから定植／ 3 昨年中に堆肥を入れて耕した花壇(6月に撮影)／ 4 鮮やかな花は手入れのたまもの／ 5 サイクリングの途中に花壇を訪れた菅原武成さん(一関)と菊池章大さん(大船渡)

技術でつながる
松田琢治さん
大東町鳥海

花壇づくりを始めた当初、草木や石ころがいっぱいだった道路の土手を整備して花を植え始めました。榮子さんには土づくりや球根の越冬について教わりました。何度も足を運んでもらったおかげで、生き生きとした花壇になりました。

想いでつながる
菊地恵子さん
中里小校長
山目

当時、大東町丑石小学校では積極的に花壇づくりを行っていました。赴任したばかりの私は、榮子さんの花壇を見に行き、カンナの球根を譲ってもらいました。子供たちや親と一緒に汗を流して作った花壇は、とても美しかったです。

音楽でつながる
吉川國十郎さん
シンガーソングライター
宮城県柴田郡

花壇の歌を作ってくれと頼まれたが、冗談だと思った。実際に花壇を見て、本気だとわかった。翌日、再度訪れ、その場で歌を完成させた。熱意には熱意で答えようと思った。詞と曲には榮子さんの夢を込めた。花壇を通じ、大切な親友ができた。

花を育てることは、容易ではありません。開花時期に合わせた作業日程の調整。肥料の種類と割合に気を配り、苗を植えた後は、開花まで草取りと水まきが必要です。また、今年の夏は非常に天候不順な夏でした。冷夏の予報に反して、結果は猛暑。盛岡地方気象台によれば、8月中旬の日照時間は平年に比べて短かく、雨の日が続いたと報告されています。日照不足と雨の日が続いたことに加え、短時間で気温が上昇したため発芽障害や根腐れが多発しました。それでも花壇づくりに取り組む人たちの情熱は枯れることはありませんでした。日々、作業を積み重ね、花壇を巡回して病気の対策をし、なんとか開花にこぎ着けたのです。厳しい条件を乗り越えて咲いた花だからこそ、その姿は美しく、見る者を和やかな気持ちにさせてくれます。満開の花壇には、多くの人が立ち寄り、会話が花が咲きました。

笑顔は連鎖します。花を育てる人の笑顔は、見る人の笑顔へとつながります。いっぱい咲いた花は、いっぱいの笑顔を生み出します。花がもたらすパワーは計り知れませんが、魅せられた人たちの思いは、これからも古里で咲き続けるでしょう。

花壇づくりは家族の絆

訪れる人が増えるにつれ、見て楽しい花壇づくりを意識するようになりました。まずは一斉に花を咲かせるため、種をまく時期を調整しました。苗はすべて種まきから。元肥を与え、花によつては小まめな追肥を。夏にはおよそ900平方メートルの草取りと水まき。毎日巡回して病気や害虫の被害を確認します。咲き終わった花がらを摘み、種はこまめに採って来年に備えることも忘れません。

最後に遊び心を加えました。人が通るとオリジナルソングが流れ、花壇の中央にはシンデレラ城を意識した板金製の大型オブジェ。片隅にはマネキンを飾り、さながらテーマパーク。オブジェは夫の政吉さん。看板は娘の由美さんが手掛けました。今年のテーマは「花と泉のまち 榮子の夢かだん」。「城には、榮子さんというお姫様が住んでいます」と笑い合う榮子さんと政吉さん。互いに寄り添って花壇づくりを続けてきました。「花を見て来てくれる人たちの笑顔が励み。これからも続けたい」と言葉弾ませました。

花と歩んだ22年の軌跡

千葉榮子さんは平成21年、市の花いっぱいコンクールの最高賞である市長賞を受賞。以来6連覇しています。その他

にも、岩手県花いっぱいコンクールでは最優秀賞を2回受賞。14年には「全国花のまちづくりコンクール推進協議会」長賞を受賞。20年に「全国花いっぱいコンクール」に入選するなど、目覚ましい活躍を続けています。

花壇づくりを本格的に始めたのは、今から22年前の平成4年。旧花泉町の花いっぱいコンクールに家庭花壇の部が設けられたことがきっかけ。「手をかけた花が咲く姿を見るのがうれしかった」と当時を振り返ります。

「えいこかだん」には笑顔が咲き誇る

花壇を通じた人とのつながり



古里に笑顔の花が咲く

花壇づくりの第一人者、佐藤芳一さんは種苗と情報の交換も楽しみの一つだったと話します。交換した種から花を咲かせて種を取り、別の種と交換する。その過程で花づくりのノウハウやアイデアに加えて、地域の情報を得ることができたといいます。花が人と人の間にある心の垣根を取り除いたのかもしれない。花の香りや色は人の嗅覚や視覚を刺激して、感受性や感情を豊かにする効果があるともいわれています。花は静かに満ちる美しい活力の源。グレーな気持ちもカラーに変える色と香りのプレゼントです。地域の花壇に咲く花々は、あなたに贈られた愛のこもった花束。きつと「きれいに咲きましたね」と声を掛けたくなるでしょう。

笑顔は連鎖します。花を育てる人の笑顔は、見る人の笑顔へとつながります。いっぱい咲いた花は、いっぱいの笑顔を生み出します。花がもたらすパワーは計り知れませんが、魅せられた人たちの思いは、これからも古里で咲き続けるでしょう。

花壇づくりのコツをアドバイス



花壇づくりの第一人者
佐藤芳一さん
大東町鳥海



家族と一緒に花づくりに取り組む芳一さん

平成2年から10年連続で大東町の花いっぱいコンクールの最優秀賞を受賞しました。現在は個人や団体の依頼を受けて花壇づくりのアドバイスをしています。私の花壇づくりへのこだわりは3つ。1つ目はテーマを持つこと。その年の出来事や家族の記念になることなどを花壇づくりに取り入れます。2つ目は素材を集めること。私は絵を描くことも好きで、花壇をキャンバスに、花を絵の具やクレヨンに見立てます。テーマに合った主役と脇役の花を決め、配色と配置を考えます。3つ目は経費をかけ過ぎないこと。花壇づくりは継続することで夢と楽しみが広がります。花は丹誠を込めることで、あなたのために咲いてくれます。

鑑賞して花の作り手を応援



花めぐり勝手に応援する会
松尾智子さん
千厩町千厩



市内8カ所の花壇をバスで巡りました

私たちは、千厩地域の花壇を中心に、毎年、市内の花壇や花畑を見て回っています。どの花壇も作り手の思いがこもった素晴らしい作品に仕上がっています。県立千厩病院中庭の花壇の草取りなども行い、花壇づくりをサポートしています。私たちの活動は、花壇づくりをしている皆さんと市民をつなぐパイプ役。私たちが花壇を見て回ることで、花壇づくりをしている皆さんの励みになればと思っています。今年のバスツアーも18人の参加がありました。参加者の表情は、花壇に到着すると一斉にほころびます。花壇づくりをしている人を交え、会話が弾みます。花が取り持つ縁をこれからも大切にしていきたいと考えています。